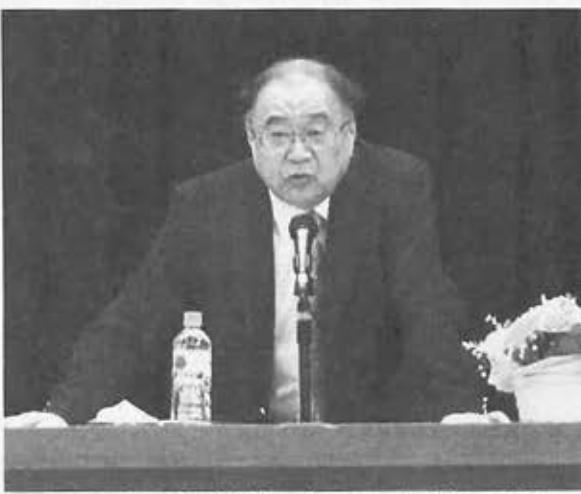


# いじめ「自分のこととして」

高木さん、故郷で講演

教育映画祭最優秀作品賞を受賞



「いじめに关心を持ち、自分のこととして考えられる人になってほしい」と生徒に呼び掛け  
る高木裕己さん=唐津市の唐津西高

トで法務大臣政務官賞を受賞した山口県の女子中学生の作品がベース。さきな

ことがきっかけで、無視されたり、嫌がらせメールを送られるようになつた女子中学生が、周囲に打ち明けることで、問題を解決するまでを描いている。

作品には「いじめる側にはいじめられる側の気持ちがわからない」「誰もが突然双方の立場になりうる」

「一人間はたくさんの人に対する力を持つ」と呼び掛けた。

## 講演要旨

その女子中学生は、父親が長距離トラックのドライバーで、その学費のため徹夜で仕事をすることもあった。母親もパートで働いていた。だから親に心配を掛けないようにと、最初は何とか自分で解決しようと我慢すると加害者はエスカレートする。その生徒は、誰にも相談につらかったね」「私に何かできることがある?」と言うことで、重複だ。

# 悩む人の心に寄り添って

悩みを抱えている人はみんな頑張っている。そんな人に「頑張れ」と言つても傷つけるだけ。大事なのは聞き上手になること。「本当につらかったね」「私に何かできることがある?」と言つてあげられる人がいるかどうかは重要だ。

いじめで一番つらかったことは張つておる。そんな人に「頑張れ」と言つても傷つけるだけ。大事なのは聞き上手になること。「本当につらかったね」「私に何かできることがある?」と言つてあげられる人がいるかどうかは重要だ。

唐津市 唐津市の唐津西高(副島一春校長)で12日、いじめ防止に関する講演会が開かれた。いじめ問題を題材にした映画で本年度の教育映画祭最優秀作品賞を受賞した、同市出身の映画監督・高木裕己さん(64)=東京都国中学生人権作文コンテスト

在住=が、生徒約580人に「無関心は駄目。いじめを自分の事として考えられる力をつけて」と呼び掛けた。いじめ問題を題材にした映画で本年度の教育映画祭最優秀作品賞を受賞した、同市出身の映画監督・高木裕己さん(64)=東京都国中学生人権作文コンテスト

いじめ自殺事件があった。テレビや新聞は「なぜ自殺したのか」という分析型の報道がほとんどで、こうしたら解決する」という提案はなかつた。それで私は提案型の映画をつくりたいと思った。背景は中学生の人権作文コンテストの受賞作に「いじめスパイラル」という作品があつた。「悩んだ末に私はこうして解決した」という内容で、ストーリーとして広がりがある。あると思い、法務局に協力してもう一度、本人と保護者に会つた。

毎年、500人もの10代の子どもが自ら命を絶つてゐる。背景はさまざまだが、「これは大変なことだ。アンケートによると、子どもたちが何か悩みがあつた時に相談する相手は、一番多いのが友達。二番目が家庭で、先生がその次だ。友達がどう相談に乗つてくれるか、悩んでいる時にきちんと応えてあげられる人がいるかどうかは重要だ。